

# 中国高齢者の生活実態と援助的ネットワーク ——大連市での調査を中心に——

李 東輝

## 1 研究の背景と目的

中国において、「一人っ子政策」の実施によって、合計特殊出生率が急速に下がるとともに、高齢化の問題が社会に注目されるようになった。中国国家統計によると、2000年に、高齢者人口の割合は6.96%になり、2003年は7%で、2006年には人口の7.9%までに増加した。そして2028年には14%に達すると予測されている。さらに、2032年に年少人口(0~14歳)と老年人口(65歳以上)がほぼ等しくなり(孫常敏 1999)、「一人っ子政策」による出生率の低下によって、今世紀にはさらに急ピッチで高齢化が進展するとみられる。

また、中国では家族による老人扶養の伝統は依然として維持されているものの、1980年代以降、子どもの数の減少や家族観の変化によって、子どもは親と同居することを望まなくなり、高齢者扶養は大きな社会問題になった。社会福祉制度が整備されていない中国において、高齢者にとっては、「経済的な不安」だけではなく、「身体的不安」と「関係性不安」など、様々な生活課題を抱えていると考えられる。しかし、中国高齢者に関する先行研究では、主に日常生活と公的な支援などに集中して、家庭援助の実態などについて、実態の調査を通して明らかにする研究はまだ稀である。

本稿では2008年から2009年大連で実施した調査をもとに、大連市の高齢者の生活にどんな課題があるか、「高齢者扶養」の家族化から社会化に転換している現在において、家族、親族、近隣のネットワークや地域の高齢者援助などが、高齢者の生活にどのように関わり、どのように分担してあっているのかを実態に即して把握することを試みる。

## 2 研究の方法

### 2.1 調査対象地区の概要

本調査の対象地域は、中国の東北部に位置する遼寧省における沿岸都市大連市であり、特有の天然良港、強い工業基盤、あらゆる面から開放され、優れた都市環境に恵まれている。2004年総合実力ベスト100都市ランキングと2006年商業都市ランキングでは、大連は全国6位と7位に評価されており、ともにベスト10に入っている(日本貿易振興会 2007)。中国では「北の香港」と言われ、経済発展の面においては、北京市と上海市と同じように著しく成長を遂げている地域である。

大連市は中山区、西岗区、沙河口区、甘井子区、旅順口区、金州区と高新園區の7つの区からなっている。2007年の都市住民一人当たりの平均年収は13,196円で、一戸あたり2.87

人である。大連市は遼寧省だけではなく、中国全国においても経済発展が速い地域と言える。また、大連市人口変動状況統計年報によると、2008年12月末の在籍人口は5,833,745人、そのうち60歳以上の人口は990,515人、60歳以上の人口の割合は16.98%を占めていて（大連市統計局 2008）、高齢化が急速に進んでいる。

## 2.2 調査概要と研究内容

調査は市内の四つの区と金州と旅順口区計6つの区の高齢者に関わる組織の協力を得て、調査員を通じて調査を実施した。回答者の年齢は、最年長者は90歳で、最年少者は65歳で、調査期間は2009年4月8日から5月末までの間である。

表1 調査の内容と分析の枠組み

本研究の 視点	経験的指標	考 察 内 容
A 生 活 実 態 と 意 識	居住形態	①家族の人数、子どもの数 ②子どもとの同別居状態および将来子どもとの同別居意識 ③配偶者との同別居状態
	家庭内役割分担と家庭内の意思決定	①配偶者と一緒に生活しているとき、家庭内の役割分業の実態 ②現在の家庭内役割の分担状況 ③家計管理と大きな買い物をする時の意思決定
	健康状態と社会参加	①分担収入源、住まいの状況      ②心配していること、健康状態 ③社会活動への参加実態          ④生活全般への評価
B 受 け た 援 助	子どもから受けた援助の実態	①子どもが学校を終えた後に、経済、家事と介護などの援助を受けた実態
	生活に困ったことがあるとき、援助してくれる人	①病気などで体の自由がきかなくなった時、身の回りの世話をしてくれる人 ②悩みや心配事があったとき、親身になって相談にのってくれる人 ③経済的に困ったとき、生活を助けてくれる人
C 影 響 要 因	性別役割分業などに関する意識	①性別役割分業に関する意識      ②老人扶養意識 ③家族に関する意識
	子どもへの援助状態	①子どもが学校を終えた後に、経済・家事などの援助の実態
	個人の属性	性別、年齢、戸籍、子どもの数、自分のきょうだい数、学歴、職業形態

本稿では主に表1に示された調査項目で考察する。まず、高齢者の生活実態を把握するために、現在の居住形態について、家族の人数、子どもの数、子どもとの同別居状態および将来子どもとの同別居意識、配偶者との同別居状態などを尋ねた。次に、子どもから受けた援助の実態、子どもへの援助実態および、生活に困ったとき援助してくれる人などについて尋ねた。

そのほか、子どもから受けた援助に影響を与える要因を考察するために、性別分担意識と子どもへの援助有無などについても回答を得た。

本研究の枠組は表1に示している。

### 3 結果と考察

#### 3.1 調査対象者の属性

表2 対象者の基本属性(N=105 男:42 女:63)

項目	区 分	%		項目	区 分	%			
性別	男性	40.0		民族	漢民族	88.6			
	女性	60.0			満 族	7.6			
					その他	3.9			
年齢	65-69歳	22.9		子どもの数	0人	5.7			
	70-79歳	50.4			1人	1.9			
	80-89歳	25.7			2人	20.0			
	90歳以上	1.0			3人	27.6			
戸籍	非農業	73.3		数	4人	17.1			
	農業	26.7			5人以上	27.7			
雇用形態	経営者 自営業主・家族従業者 常勤 パートなど 仕事なし その他	男性	女性	教 育	教育程度		男性	女性	全体
		2.4	3.2		教育を受けなかった	14.3	43.5	31.4	
		2.4	14.3		小学校	21.4	11.3	16.2	
		81.0	55.6		中学校	21.4	27.4	24.8	
		4.8	4.8		高等学校	14.3	9.7	11.4	
		2.4	4.1		短期大学	11.9	6.5	8.6	
		7.2	11.1		大学以上	14.3	1.6	6.7	
		2.4	11.1		その他	2.4	0	1.0	
家族の構成	一人暮らし	7.6		兄弟の人数	1人	4.8			
	夫婦だけ	50.5			2人	10.5			
	子どもと同居	35.2			3人	14.3			
	その他	6.7			4人	23.8			
				5人以上	46.7				
婚姻状態	未婚 配偶者と同居 死別 離婚 配偶者と別居	男性	女性	合計	信仰	宗教種類		%	
		2.4	0	1.0		仏教	9.5		
		83.3	50.8	63.8		プロテスタント	4.8		
		7.1	46.0	30.5		特に信仰している宗教はない	80.0		
		4.8	3.2	3.8		その他	5.7		
		2.4	0	1.0					

表2に示されたように、今回の調査対象者の中で、男性は42人、40.0%を占めており、女性は63人、60.0%を占めている。調査対象者の平均年齢は74.8歳、標準偏差は6.3で、70代の人が50.4%で、80代以上的人是26.7%を占めている。そのうち女性の平均年齢は74.6（標準偏差6.97）、男性の平均年齢は75.2（標準偏差は5.20）。非農業戸籍は73.3%、農業戸籍は26.3%である。家族人口は平均で2.8人、家族構成は一人暮らしの家族は7.6%、夫婦だけの世代は50.5%、子どもと同居しているのは35.2%、その他は7.7%である。

兄弟の数は平均で4.47人、標準偏差は1.84、3人から6人までが一番多く、調査対象者の71.4%を占めている。婚姻状況をみると、結婚していない人は1人で、結婚率が高いと言える。結婚年齢について、男性の結婚年齢の最小値は17歳、最大値は43歳、平均24.9歳、中央値は24.0、最頻値は22歳で、標準偏差は5.33である。女性の結婚年齢の最小値は17歳、最大値は29歳、平均21.1歳、中央値は21.0歳、最頻値は18.0歳、標準偏差は2.82であ

る。

調査対象者の生まれた子どもの数をみると、2人から5人までが一番多く、調査対象者の76.1%を占めている。子どもの平均数は3.66人、標準偏差は2.03である。親世代と比べて、子どもを持つ数が0.81人減少している。

もとの雇用形態としては、常勤が一番多く、男性は常勤が全体の81.0%、女性は55.3%、家庭主婦は4.1%であった。学歴は学校教育を受けたことがなかったのは31.4%、小学校から中学までの教育を受けたのが41.0%を占めていた。漢民族は88.6%と、一番多かった。

信仰としては、仏教は9.5%、プロテスタントは4.8%、「特に信仰している宗教はない」人は80.0%である。

### 3.2 高齢者の生活実態

表3 家族の構成と子どもと同別居の現状など(%) (N=105 男:42 女:63)

家族の人数	人 数	年 齢 別			性 別		
		70歳以下	70～79歳	80歳以上	男性	女性	割合 (%)
	1 人	1.0	1.0	5.8	7.1	7.9	7.6
	2 人	7.6	32.4	13.3	69.0	42.9	53.3
	3 人	3.8	4.8	1.9	0	17.5	10.5
	4 人	3.8	5.7	1.9	4.8	15.9	11.4
	5 人以上	6.7	6.7	3.8	7.1	15.8	17.2
家族の構成					男性	女性	合計
	一人だけ				7.1	7.9	7.6
	夫婦だけ				66.7	36.5	48.6
	結婚した子どもの家族				21.4	44.4	35.2
	未婚の子ども				2.4	3.2	2.9
	その他（(夫婦+保母さん=1, 自分+孫=5)				2.4	7.9	5.7
子どもとの同別居	①自分は結婚していない			同居している子ども	長男（夫婦）		33.3
	②同居したことがない				長男以外の息子（夫婦）		35.9
	③現在同居している				長女（夫婦）		5.1
	④現在は同居していないが、同居したことがある				長女以外の娘（夫婦）		23.1
	⑤子どもがまだ結婚していない				無回答		2.6

表3に示されたように、現在家族の人数をみると、一番少ないのは1人で、一番多いのは6人である。そのうち、一人暮らしの高齢者が7.6%で、80歳以上の人が一番多い。2人の家族は56人で、53.3%、その中で、夫婦二人だけの家族は51人、48.6%で、調査対象者の半分に近い。また、2人家族の中で、70歳から79歳までの高齢者が34人で、もっとも多い。3人家族は11人、10.5%をしめている。4人以上の家族は30人、28.6%を占めている。

配偶者が健在か否かの状況をみると、健在しているのは68人、そのうち、配偶者と同居しているのは67人、64.4%を占めている。死別したのは32人、30.5%をしめており、離婚したのは2人で、4.8%をしめている。



また、「配偶者と同居しているかどうか」を性別にみると、カイ二乗検定の結果は有意水準5%で有意な関係がみられた ( $\chi^2=12.95$   $P<0.001$ )。即ち、「配偶者と同居している」人は、男性が52.2%で、女性の47.8%を上まわっている。一方で、「同居していない」人は、女性が83.3%で、男性の16.2%を大幅に上まわっている。即ち、一人暮らししている高齢者の中で女性が多いことがわかった。

そのほか、現在結婚した子どもと同居しているかどうかについて尋ねた結果、「同居したことはない人」は40人、38.1%であり、「現在同居している」人は37.1%であり、「現在は同居していないが、同居したことがある」人が21.0%を占めている。続いて、「現在どの子どもと同居しているのか」について、息子（夫婦）（長男夫婦＋長男以外の息子）と同居しているのが合計69.2%、娘と同居している（28.2%）より大幅に上回っている（表3）。

さらに、「子どもとの同居について、満足かどうか」という質問について、「満足している」と回答した者は97.4%で、現在の居住状況にほとんどの人が満足していることがわかった。

現在子どもと同居していない人に、「将来子どもとの同居を希望しているか」について、「同居したい」と考えている人は20.0%、「同居したくない」と思っている人は25.7%、「考えたことはない」人は48.6%であった。

### 3.3 家庭内役割分業の実態

#### 3.3.1 配偶者と過ごしたときの家事分担について

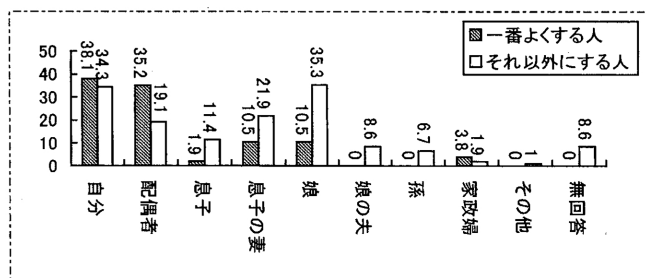


図1 配偶者と過ごした生活の中で、もっとも最近の家事についての状態 (N=105)

「配偶者と過ごした、もっとも最近の生活」に関して、料理・掃除・洗濯などの家事を主にする人の順番からみると、自分が一番多くて、38.1%である。配偶者はその後について35.2%、三番目は息子の妻と娘で、10.5%と同様で、四番目は家政婦で、3.8%である。

「それ以外に料理・掃除・洗濯などの家事をしてこられた方」について、娘が一番多く35.3%、続いて、自分が34.3%、三番目は息子の妻で21.9%、四番目は配偶者で、19.1%である（図1）。

配偶者と過ごした生活の中で、もっとも最近の家事の分担について、性別にみると、カ

イ二乗検定の結果は有意水準5%で有意な関係がみられた ( $\chi^2=53.98$   $P<0.001$ )。即ち、一番よく家事をする人は女性で、9割近くに達している(図2)。

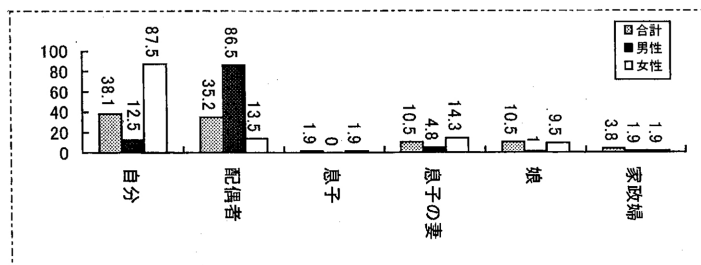


図2 配偶者と過ごした生活の中で、もっとも最近の家事についての性別差異 (N=105)

そのほかに、現在の料理・洗濯・掃除などの家事は主に誰がしているかについて、図3にあるように、自分が一番多くて、44.8%である。その後に配偶者が続いて、23.8%，三番目は「息子の妻」で、15.2%，四番目は「娘」11.4%である。その他、「家政婦」は2.9%である。

また、「自分」と「配偶者」と回答した人の性別をみると、図4に示されたように、女性は圧倒的に多く家事を担当していることがわかった。一番よくする人の中で、高齢者自身のほかに、「息子の妻」と「娘」の順である。

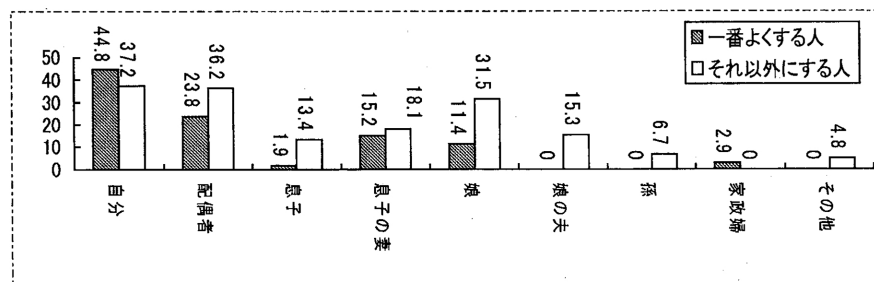


図3 現在の家族で家事を担当する状況 (N=105)

「それ以外にする人」について、高い順からみると、一番目は自分で37.2%，二番目は「配偶者」の36.2%，三番目は「娘」で31.5%，四番目は「息子の妻」で18.1%，五番目は「娘の夫」で、15.3%，六番目は「孫」で、6.7%である。いずれも自分と子どもなどの家族を中心にしてやっていることがわかった(図3)。特に、高齢女性自身の外に、娘が(31.5%)自分の親の家事をよくしていることがわかった。

現在の家庭内の役割分担を性別にみると、カイ二乗検定の結果は有意水準5%で有意な関係がみられた ( $\chi^2=32.96$   $P<0.001$ ) が、図4に示されたように、一番よく家事をする人

は女性である。

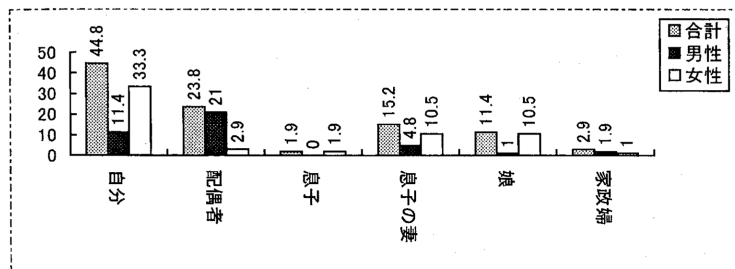


図4 現在の家事を一番よくする人に関する性別差 (N=105)

### 3.3.2 家庭内意思決定について

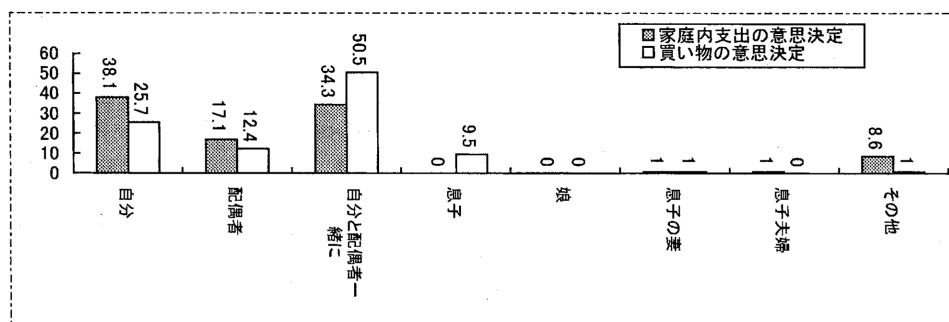


図5 配偶者と過ごした生活の中で、もっとも最近の家庭内意思決定について (N=105)

調査対象者は配偶者と過ごした生活の中で、もっとも最近の「家庭内支出の意思決定」について、「自分」と答えた人が一番多く、38.1%である。続いて、「自分と配偶者一緒に」で、34.3%、3番目は「配偶者」、17.1%である(表5)。

性別をみると、カイ二乗検定の結果は有意水準5%で有意な関係がみられた( $\chi^2=12.06$   $P<0.05$ )。「自分」(男性は23.8%, 女性は47.6%)と「配偶者」(男性は21.4%, 女性14.3%)の結果をみると、興味深いことは、女性は男性より意思決定が強いことである(図6)。

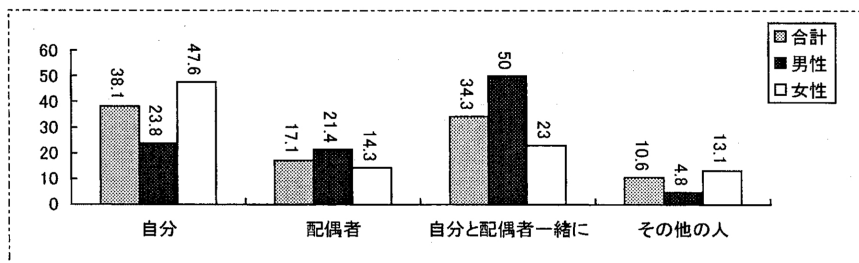


図6 家庭内支出に関する意思決定の性別差 (N=105)

また、「家庭で大きな買い物をするとき」に関する意思決定について、「自分と配偶者と一緒に」と回答した者は一番多く、半分以上である(50.5%)。その次は「自分」と回答した者で、25.7%である。性別にみると、カイ二乗検定の結果は有意水準5%で有意な関係がみられなかった( $\chi^2=8.24$ ) (図7)。すなわち、「大きな買い物についての意思決定」は性別に差は大きくない。

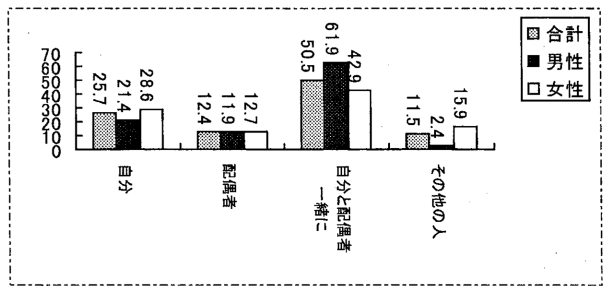


図7 大きな買い物についての意思決定 (N=105)

### 3.4 高齢期の生活不安

#### 3.4.1 現在の収入源

高齢者の現在の収入源をみると、図8に示しているように、一番多いのは「自分の年金・恩給」で、53.3%である。その他に「自分の仕事によって得られた収入」(11.4%)と「別居している息子の援助」(10.5%)である。そのうち、「もっとも多く収入を得ているのはどれか」ということについて、一番多いのは「自分の年金・恩給」で、52.4%である。あとは「自分の仕事によって得られる収入」(11.4%)と「別居している息子の援助」(8.6%)という順である。すなわち、「自分の年金・恩給」と「自分の仕事によって得られる収入」で生計を立てている高齢者が調査者全体の6割以上を占めており、子どもの援助で生計を立てている高齢者は2割近くいる。

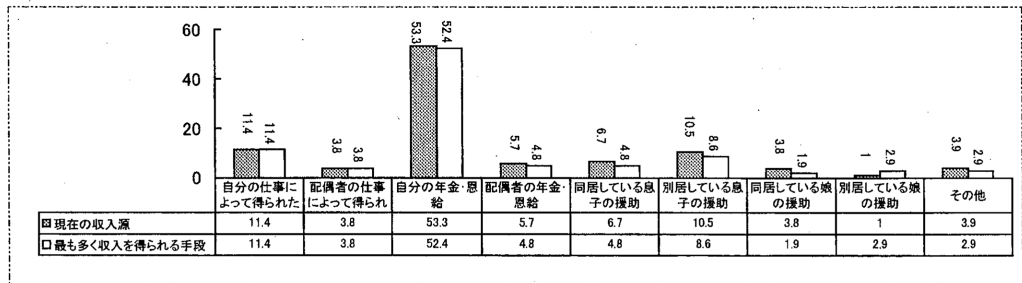


図8 収入源についての調査結果 (N=105) (MD)

### 3.4.2 持ち家と現在の健康状態

高齢者の現在の居住状態をみると、「一戸たての持ち家」と「アパート」を持っている人を合わせて、94.3%で、ほとんどの高齢者は自分の家を持っていると言える。この一年の健康状態について、「非常に良好」と「おおむね良好」と思っている人が69.5%、七割近くに達している。「やや悪い」と答えた人は10.5%で、「大変悪い」と回答した人は1.9%であり、調査した大部分の高齢者は健康状態が良好である。

また、現在の生活の中で、心配することがあるか否かについて、「ある」と答えた人は18人、17.1%をしめており、「ない」と答えた人は87人、82.9%である。現在の生活に関して、「非常に満足している」人が40人、38.1%をしめている。「まあ満足している」人は61人、58.1%で、「やや不満である」と回答した人が4人で、3.8%しかいない。この結果からみると、調査した高齢者の8割以上は安心して高齢生活を送っていると言える。

表4 社会活動への参加 (N=105)

内 容	1. ほぼ毎日	2. 週に一回以上	3. 月に1回以上	4. 2-3ヶ月に一回	5. 年に数回	6. ほとんどしない	7. まったくしない
1. 同窓会への参加	1.0	0	0	0	7.6	19.0	72.4
2. 同郷会への参加	0	1.0	1.0	0	6.7	19.0	72.4
3. 親戚の集まりへの参加	0	0	1.9	1.0	14.3	18.1	64.8
4. 同好会や趣味活動への参加	1.9	3.8	6.7	1.9	15.4	17.3	52.9
5. 教会や寺などに行くこと	0	5.7	1.9	0	8.6	18.1	65.7
6. ボランティア活動をする	1.0	2.9	0	2.9	14.3	25.7	53.3
7. スポーツをすること	22.9	11.4	1.9	0	6.7	21.0	36.2
8. 映画・芝居・コンサート・展示会などに行くこと	1.0	1.0	3.8	2.9	6.7	23.8	61.0
9. 繁華街での買い物やデパートに行くこと	1.0	4.8	18.1	12.4	15.2	9.5	39.0
10. 同世代の友人・知人などに会うこと	8.7	5.8	13.5	15.4	26.9	6.7	23.1
11. 若い人たちと話をすること	12.4	21.9	9.5	8.6	13.3	8.6	25.7
12. 夫婦で外出すること	8.6	10.5	5.7	5.7	19.0	10.5	40.0

そのほか、高齢者の社会活動参加をみると、表4に示されたように、「スポーツをすること」「若い人たちと話すこと」と「夫婦で外出すること」以外に「ほとんどしない」と「まったくしない」と回答した者が多い。高齢者は社会参加に積極的にしていないことがわかった。

## 4 高齢者の援助状態とその影響要因

### 4.1 子どもとの援助的な関係について

#### 4.1.1 子どもとの経済的な援助関係

子どもから受けた経済的な援助の実態について「援助をうけたことはない」と答えた人は30.5%で、「現在うけていないが、援助をうけたことがある」と答えた人は12.4%、「現在受けている」と答えた人は50.5%で、半分以上を占めている。「現在援助を受けている」人のうち、6割以上の人は子どもからうけた援助である（表5）。

表5 子どもとの経済援助の実態について（N=105）（%）

子どもからの経済的援助	1. 援助を受けたことはない	2. 現在受けている				3. 現在うけていないが、援助をうけたことがある				4. 無回答
	30.5 (32人)	50.5 (53人)				12.4 (13人)				6.7 (7人)
		1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘(夫婦)	1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘(夫婦)	
		62.3	43.4	56.6	40.0	84.6	23.1	53.8	46.2	
子どもへの経済的援助	1. 援助をしたことはない	2. 現在援助している				3. 現在していないが、援助をしたことがある				4. 無回答
	38.1 (40人)	25.7 (27人)				29.5 (31人)				5.7 (6人)
		1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘(夫婦)	1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘(夫婦)	
		59.2	40.7	44.4	11.1	41.9	45.2	54.8	35.5	
子どもとの経済的援助関係への評価	とても満足	まあ満足				あまり満足していない				まったく満足していない
	50.5	40.0				1.9				1.0

また、子どもへの経済的援助について、「援助をしたことはない」と答えた人は38.1%で、「現在援助している」（25.7%）と「現在していないが、援助をしたことがある」（29.5%）と答えた人を合わせて、6割以上である。子どもとの経済的な援助関係への評価について、9割以上の人が「満足している」と答えた。

#### 4.1.2 子どもとの家事援助について

子どもから受けた家事の援助について、「現在援助を受けている」と「現在は受けていないが、援助を受けたことがある」と回答した人をあわせて70.5%で、特に、「長女（夫婦）」と「長女以外の娘（夫婦）」からの援助が高いのは注目すべきである。子どもへの援助をみると、「現在援助をしている」と回答した人の中で、長女以外の娘（夫婦）への援助が一番多く、40.0%で、続いて「長男（夫婦）」（36.0%）である（表6）。

表6 子どもとの家事援助について (N=105) (%)

形式	1. 援助を受けたことはない	2. 現在援助を受けている	3. 現在は受けていないが援助を受けたことがある	4. 無回答
子どもからの家事援助	22.9 (24人)	62.9 (66人)	7.6 (8人)	6.7 (7人)
	1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘(夫婦)
	37.9	25.8	36.4	37.9
子どもへの家事援助	40.0 (42人)	23.8 (25人)	25.7 (27人)	10.5 (16人)
	1. 長男(夫婦)	2. 長男以外の息子(夫婦)	3. 長女(夫婦)	4. 長女以外の娘夫婦
	36.0	20.0	32.0	40.0
子どもとの家事援助関係への評価	とても満足 37.1	まあ満足 53.3	あまり満足していない 1.9	まったく満足していない 0
				無回答 7.6

## 4.1.3 援助的なネットワーク

調査対象者は子どもから介護を受けたことについて、表7に示されたように「現在受けていないが、援助を受けたことがある」と回答した人が一番多く、調査対象者の47.6%を占めている。「現在受けている」と回答した人は調査対象者の26.7%を占めていて、「援助を受けたことはない」と回答した人は調査対象者の21.9%を占めている。

表7 子どもから受けた介護について (N=105) (%)

子どもから介護をしてもらった経験	1. 援助を受けたことはない	2. 現在受けている	3. 現在受けていないが援助を受けたことがある	4. 無回答
どの子どもからの援助	21.9 (23人)	26.7 (28人)	47.6 (50人)	3.8 (4人)
	長男夫婦	長男以外の息子夫婦	長女夫婦	長女以外の娘夫婦
	64.3	35.7	53.6	25.0
お子さんからの介護についての評価	とても満足 58.1	まあ満足 27.6	あまり満足していない 7.6	まったく満足していない 1.9
				無回答 4.8

「あなたが病気などで体の自由がきかなくなった時、みの周りの世話をしてくれる人」について尋ねた結果をみると、一番多いのは「娘」(82.0%)、続いて「息子」(68.7%)、「息子の妻」(61.9%)、「配偶者」(53.4%)、「娘の夫」(43.8%)、「孫」(28.6%)と「兄弟姉妹」(11.5%)である(図9)。

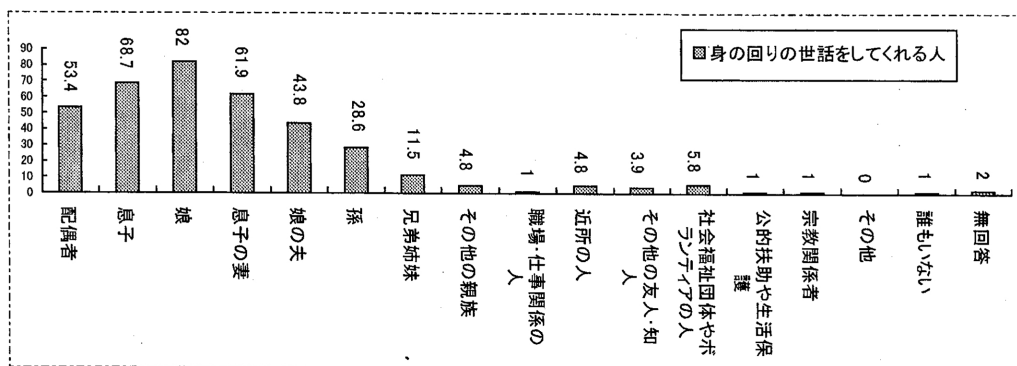


図9 身の回りの世話をしてくれる人について (N=105) (MD)

次に、「悩みや心配事があったとき、親身になって相談にのってくれる人」について、「娘」(82.1%)が一番多く、続いて「配偶者」と「息子」、三番目は「孫」(33.3%)で、四番目は「息子の妻」(29.4%)、五番目は「兄弟姉妹」(25.7%)である(図10)。

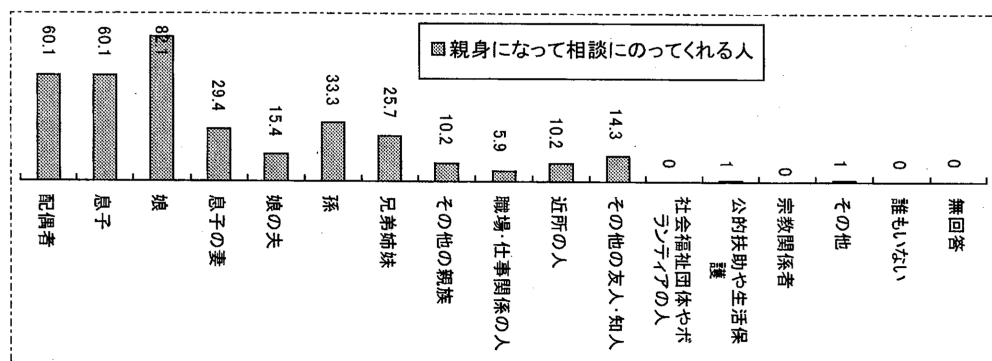


図10 悩みや心配事があった時、相談にのってくれる人について (N=105) (MD)

そのほかに、「経済的に困った時、生活を助けてくれる人」について尋ねた。その結果は図11に示されたように、助けてくれる人は「娘」(82.0%)で一番多く、その次は「息子」(68.7%)になっている。その後は「息子の妻」(40.1%)「娘の夫」(34.4%)「兄弟姉妹」(25.8%)と「配偶者」(24.8%)である。



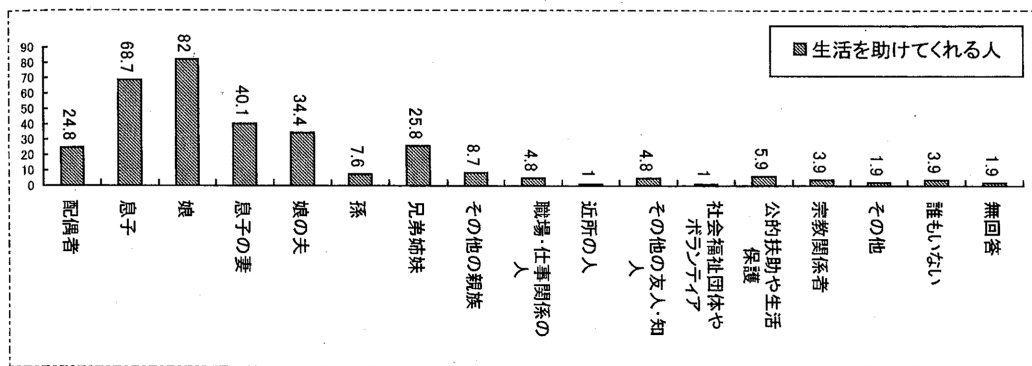


図11 経済的に困った時、生活を助けてくれる人 (N=105) (MD)

以上の結果をみると、調査対象者にとって、現在、よく助けてくれる人は「配偶者」「子ども」「子どもの配偶者」と「兄弟姉妹」という家族・親族である。特に、「娘」が一番多く援助していることがわかった。

#### 4.2 子どもから受けた援助に影響を与える背景的な要因

高齢者への経済的な援助に影響を与える要因を考察するために、子どもから受けた経済的な援助の有無と「性別」、「年齢」、「戸籍」、「子どもの数」、「子どもへの援助の経験」、「老人扶養に関する意識」、「家族に関する意識」との関連を相関分析で考察した。その結果、有意水準5%で有意な正の関係がみられた変数は「性別」「戸籍」「子どもの数」と「子どもへの援助有無」で、負の相関が見られた変数は「学歴」である。即ち、女性は男性より子どもから受けた援助が多い。「農業戸籍」の人が「非農業戸籍」の人より子どもから多く援助を受けている。子どもの数が多いと、受けた援助も多い。また、子どもへの援助が多いほど子どもから受けた援助が多い。「学歴」が高いほど子どもが受けた経済的な援助が少ない。

表9 子どもから受けた援助に影響を与える背景的な要因 (N=105)

	性別	戸籍	学歴	子どもの数	子どもへの援助の有無	性別役割分業に関する意識①
子どもから受けた経済的援助	0.235*	0.276**	-0.232*	0.261*	0.453**	—
子どもから受けた家事援助	—	—	—	0.290*	0.290**	—
自分が受けた介護	—	—	—	—	—	0.246*

\* :  $p < 0.05$  \*\* :  $p < 0.01$

注：(1) 性別 (男性=1 女性=2)；戸籍 (非農業戸籍=1 農業戸籍=2)；

子どもへの援助の有無 (ない=1 現在はしていないが、援助したことがある=2 現在援助している=3)

(2) 家族・ジェンダー・老人扶養に関する意識を考察する項目は次のようである。

(そう思う=1 ややそう思う=2 あまりそう思わない=3 そうは思わない=4)

- ①妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼いでくるべきだ (※相関がみられた変数)
- ②重要な仕事をもっている、やはり女性の本来いるべき場所は家庭だ
- ③男性も、女性と対等に、家事や育児を分担すべきだ
- ④女性もお金を稼ぐ責任を男性と対等に分担すべきだ
- ⑤お互いのことを本当に助け合い、思いやれるのは家族だけだ。
- ⑥長男が責任をもつべきだ。
- ⑦家族が親の世話をするとすれば、子どもが平等に分担してみるべきだ
- ⑧親の身の回りの世話などは、基本的には親の経済力でまかなえばよい
- ⑨年老いた親の世話は、社会の責任として行うべきだ。

次に、「子どもが学校を終えた後に、家事の援助を受けたことがあるか」どうかに影響を与える背景的な要因について、「性別」、「年齢」、「戸籍」、「子どもの数」、「子どもへの援助の有無」、「老人扶養に関する意識」、「家族に関する意識」「性別役割分業に関する意識」との相関分析で考察した。その結果は表9にあるように、「子どもの数」と「子どもへの援助の有無」と有意な相関がみられた。即ち、子どもが多いほど子どもから受けた家事の援助が多く、また、子どもへの家事援助をしたことがある人は子どもから得られた援助が多い。

その他に、「あなたは、病気や怪我の継続的な看病、体が不自由な場合の介護など」に影響を与える要因について、相関分析の結果、有意な相関がみられたのは「妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼いでくるべきだ」という項目だけである。即ち、伝統的な性別役割規範意識が弱いほど、子どもから受けた援助が多い。

## 5 まとめと今後の課題

当該地域における高齢者の生活実態と援助的な状態に関して、今回の調査データに基づいて、考察分析を通して、明らかになったことは以下の3点である。

第1に、高齢者の生活は比較的に安定している。

まず、夫婦ともに健在している高齢者は子どもとの同居率が低い。調査地域では、配偶者と二人だけで暮らしている人は52.1%で、息子夫婦と同居している人は21.0%近く、娘と同居している人は13.0%である。

次に、現在の生活を維持している収入源について、自分と配偶者の収入で生計を立てている人は43.5%、子どもたちの援助をしている人は34.1%を占めている。87.0%の被調査者の住居は持ち家である。そのほか、同窓会など社会活動に参加する頻度が低い。

第2に、現在の家庭内役割分担について、女性は男性より多く担っている。

最近の生活と配偶者と一緒に生活している中、家事を一番よくやっているのは「自分」と「配偶者」で、そのうち、一番目よく家事をする人は女性で、9割近くに達している。

また、家庭内意思決定について、女性は男性より意思決定が強いことがわかり（図6）、「大きな買い物」についての意思決定にも性別に有意な差が見られなかった。

第3に、高齢者の生活援助に関して、知人・友人などのような地縁の援助に比べて、子どもから経済的援助を受けている人が多い。その一方で、家事と介護の援助が少ない。また、「病気などで体の自由がなくなったとき、身の回りの世話をしてくれる人」、「悩みや心配事があったとき、相談にのってくれる人」と「経済的に困ったとき、生活を助けてくれる人」など日常生活を支えている援助ネットワークに関して、挙げられた人は、「配偶者」、「子ども」、「嫁と婿」、「兄弟姉妹」と「孫」などであり、高齢者の生活援助は主に家族と親族に支えている。

また、「性別」「戸籍」「子どもの数」と「子どもへの援助有無」と「学歴」は子どもから受けた援助の有無に影響を与えている。

すなわち、女性は男性より、「農業戸籍」の人が「非農業戸籍」の人より、子どもの数が多い人は少ない人より、子どもへの家事援助をしたことがある人はない人より、子どもから受けた援助が多く、「学歴」が高いほど子どもが受けた経済的な援助が少ないことがわかった。

中国において、少子化による親世代にとって、最大の不安は老後であることも事実である。子どもが親を扶養する、介護するのは四千年続いた中国の伝統で『孝』が最高の美德とされてきた。「一人っ子政策」を国策として実施してから、「養児防老」（老後保障のため、子どもを産む）と「多子多福」（子どもが多ければ老後に心配はない）といった伝統的な子女観をどう払拭するかという中国が直面した課題は、同時にそのまま人口高齢化にともなう老人をどうするか、という社会保障制度の整備問題につながっている。中国では「一人っ子政策」により、一人の子どもに両親が二人、祖父母四人という世代間構成が生じた。このような世代間構成は、扶養問題や子どもへの甘やかしなどの問題をもたらした「四二一総合症」と呼ばれて、将来に影を落とし、深刻な問題となっている（若林 1994）。

今日では結婚した二人が四人の親の扶養や介護をするのは現実的でないと、どの親も思うようになってきている。日本のような老後に頼みのホームは民間の施設はまだ多くない。さらに、公的な施設も増えているがまだ少ない。少子化により空白化した学校施設を高齢者の養護ホームに転用するよう求める議論も出ている。そのような状況で、四十、五十歳代の親は老後に備え、今、懸命に貯蓄に努めている。したがって、高齢社会へ急進中の中国にとっては、老人扶養体制の確立と年金など社会保障制度改革が緊急の重要課題である。今後、少子化、高齢化社会の進展は必至であるが、子どもの数や世帯構成員数の減少から、親族から援助を得ることができなくなった時、社会はどのように対応するのだろうか。このような家族・親族を中心に援助的なネットワークが、どのように変わっていくかの具体的な考察は今後の課題とする。

本稿は日本学術振興会の研究助成による「20世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース——家族イベントの聞き取りを通して」（研究代表者 山根真理）のうち、2009年に大連市で行った調査の一部を使ってまとめたものである。

[文献]

若林敬子，1994，『中国 世界超大国のゆくえ』岩波新書。

若林敬子，1996，『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社。

李新伟，2002，「中日人口老龄化比较研究」东北亚论坛（3）。

向珊，2006，「中国における高齢者介護の行方について——都市部を中心に」『地域政策研究（高崎経済大学地域政策学会）』8（4）：87-92。

孫常敏，1999，『世紀轉換中的全球人口与發展』上海社会科学院出版社。

王文亮，2001，『中国の高齢者の社会保障——制度と文化のゆくえ』白帝社。

大連市統計局，2008，『大連市統計年鑑』大連市統計局。

日本貿易振興会（ジェトロ）大連事務所，2007，「大連市概況」。

（り　とうき　中国・大連外国語大学）

# Research on the Living Conditions and Assistance Sources of the Old in China: Based on the Survey Made in Dalian

LI Dong hui

## Abstract

With the number of the old people increasing sharply in China, people pay more and more attention to the research on the problems related to the old. However, there has been little research on the living conditions and assistance sources of the old in China. This paper is based on the survey made in Dalian, aiming to present the daily life and assistance sources of the old. At the same time, the state of assistance between the old and their children, and its reasons have been studied. The conclusions are as follows:

First, the number of the old living alone is greater than that of the old living with their children. Among those surveyed, the old living alone account for 48.6% of all the people surveyed while the old living with their children 37.1%. Most of the old have assurance, few people have economic trouble, and more than 90% of them are satisfied with their life.. In addition, the old take part in few social activities.

Second, the assistance sources, whether in economy, psychology or housework, largely rely on their children. Most of the surveyed think that daughters are the indispensable assistance source in their life.

Third, the analysis of the survey shows that there are a number of reasons influencing the amount of assistance ,such as the gender of the old, the family register, the number of children, the past experiences of assistance, traditional gender criterion and so on.

(Keywords: the old living conditions assistance, source)